『埼玉大学紀要（教養学部）』第54巻第1号、2018年

飛鳥井雅経『鳥羽百首』「立春」「花」「郭公」歌注釈

稲葉美樹*

『鳥羽百首』は飛鳥井雅経の家集『明日香井集』の最初に配されている。建久九年（一一九八）に詠作が開始されたことが知られ、詠作時期が判明する雅経歌の最初の作品である。本稿では、『鳥羽百首』の最初の三題、「立春」一〇首、「花」一〇首、「郭公」七首の計二七首について、校異、他文献、現代語訳、本歌、参考歌、語釈、補説をまとめたものである。

キーワード：　飛鳥井雅経　『明日香井集』『鳥羽百首』

はじめに

飛鳥井雅経の家集『明日香井集』は、栄雅（飛鳥井雅親、雅経の末裔。応永二三年〔一四一六〕―延徳二年〔一四九〇〕）の識語によって、雅経の孫雅有の撰により、永仁二年（一二九四）春頃成立したと知られる。一六七二首を上下二巻に収める。構成は、上巻には定数歌を、百首歌・五十首歌・その他の定数歌の順に、さらにそれぞれの中で詠作順に収めている。下巻には、前半に小規模な歌会・歌合歌を詠作順に配し、後半に四季・恋・雑から成る部類歌を収める。伝本は、二〇本以上現存するが、「現存諸本は、語句・歌の順序に小異がある程度で、すべて同系統と考えられる。[1]」とされる。現存最古写本は、冷泉家時雨亭文庫蔵本であるが、これを祖本とするとされる日本大学総合図書館蔵本（九一一・一四八・A・九三）に比して三四四首の欠脱があるものの、日大本の増補と見られる箇所もあるとされる。[2]また、伝本の中には、栄雅の識語の後に文明一五年（一四八三）の宋世（飛鳥井雅康、栄雅の弟で、その猶子となる）の奥書を有するものも複数ある。

本稿で扱う『鳥羽百首』は、『明日香井集』の最初に配されている。「建久九年五月廿日始之毎日十首披講之」という注記を持ち、雅経二九歳の時の詠であることが知られる。詠作時期が知られる雅経歌の中で最も早い時期の作である。

雅経の父頼経は、源義経に同心した罪科により、文治五年（一一八九）伊豆に流された。雅経もその後、時期は明らかでないが鎌倉に下向し、在住していたが、後鳥羽院の命により建久八年（一一九七）二月に上洛した。雅経は正治二年（一二〇〇）以降、後鳥羽院歌壇に加えられるが、『鳥羽百首』はそれに先立つ作品である。立春・花・郭公・五月雨・月・紅葉・雪・歳暮・恋・述懐の十題。各題十首だったのであろうが、五月雨・月・紅葉・歳暮は各九首、郭公は七首の計九三首しか現存しない。他の歌人に同じ題の作は見られず、私的な作と考えられる。本稿では、『鳥羽百首』の最初の三題、すなわち、立春・花・郭公題の計二七首の注釈を行う。いずれ全歌の注釈を行いたいと考えているが、その第一歩としたい。

* いなば・みき、埼玉大学教養学部非常勤講師、日本中世文学

(1)『私家集大成』（日本文学ｗｅｂ図書館、古典ライブラリー）『明日香井集』解題（有吉保氏）。

(2) 冷泉家時雨亭叢書『中世私家集六』（二〇〇二年六月、朝日新聞社）解題（久保田淳氏・小林一彦氏）。

凡例

一、本稿は、日本大学総合図書館蔵本（九一一・一四八・A・九三）を底本とする『私家集大成』（日本文学ｗｅｂ図書館、古典ライブラリー）の『明日香井集』により、注釈を試みたものである。

二、本文について、漢字と仮名の区別は底本のままとしたが、読解の便を考慮して次の処置を施した。

・仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一し、濁点を補った。

・底本本文に何らかの問題があって解釈に支障がある場合には、『新編国歌大観』（日本文学ｗｅｂ図書）を参照して改め、原表記等をカッコ内ルビで示し、【語釈】欄で説明した。

三、歌頭に『新編国歌大観』の番号を付した。

四、注釈には、【校異】【他文献】【現代語訳】【本歌】【参考歌】【語釈】【補説】の項目を立てて記した。

五、【校異】は栄雅識語を有する、冷泉家時雨亭叢書『中世和歌集六』所収『明日香井集』（「冷」と略記する）、宮内庁書陵部蔵本（五〇一・一〇〇、仮に「書A」と略記）、および宋世奥書も有する宮内庁書陵部蔵本（二六六・七〇九、仮に「書B」と略記）の異文を、仮名遣いや送り仮名などのような解釈に影響しないと思われるものを除いて、底本本文とともに原態本文で示した。[3]

六、【他文献】は、当該歌が勅撰集・私撰集・他の私家集などに入っている場合に、その所在と校異を示した。

七、【現代語訳】は、本文の各語に即しつつ、わかりやすさに留意した。

八、【本歌】には、本歌取りにおける本歌と認定される歌を掲げた。

九、【参考歌】には、解釈などの参考になると思われる歌を掲げた。

一〇、【語釈】では、語句を抜き出して、解釈や解説を加えた。

一一、【補説】では、表現の特性、先行歌との関係、私見などを記した。

一二、引用和歌資料は特に断らない限り、『新編国歌大観』によった。

鳥羽百首　建久九年　五月廿日始之
毎日十首披講之

詠百首和歌　侍従

立春

一　あづまぢをいそぎたちけるほどみえてことしこえぬるあふさかのはる

【校異】　ほどみえてことしこえぬるあふさかのはる―ほと（改行…稿者注）ことしこえぬるあふさかのはる　（冷）、

関に

ほとことしこえぬる関にあふさかのはる（書A）、程〇（本マヽ）ことしこえぬるあふさかのはる（書B）

【他文献】　なし

【現代語訳】　東路をよほど急いで発ったとみえて、今年の内に逢坂の関を越えて会う春である。

【参考歌】

あさ日さすきしの青柳うちなびき春くる方はまづしるきかな

（『拾遺愚草員外』三八四）

都まで立ちくるほども久しきに行きてやみましあふさかの春

(3) 宮内庁書陵部蔵本はいずれも、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースの画像による。

（『御室五十首』一〇一、藤原隆房）

せきのとをささでいくかになりぬらんみちある御代にあふさかの春（『百詠和歌』三二）

【語釈】

○あづまぢ―ここでは東国。五行説では東が春の方角とされるため、春が東国を発ったとする。五行説に基づく作に、同時代では参考歌欄「あさ日さす」歌などがある。

○いそぎたちける―急いで出発した。

○ほどみえて―「ほど」はここでは急いだ程度、どれだけ急いだか。

○ことしこえぬる―今年の内に越えた、の意。越えたのは春、すなわち年内立春である。「ことしこえぬる」という表現は、この歌以外に見られない。

○あふさかのはる―「あふさか（逢坂）」は近江国の歌枕。山城国と近江国の境にある逢坂山。奈良時代以来逢坂の関が置かれ、畿内と東国との境であった。「あふ」に「会ふ」を掛ける。「あふさかのはる」という表現は、この歌以外には、参考歌欄「都まで」「せきのとを」歌に見られるのみである。『御室五十首』は守覚法親王主催。建久九年（一一九八）一二月以降、正治元年（一一九九）三月以前に詠進したかとされる。『百詠和歌』は源光行作。元久元年（一二〇四）一〇月成立。したがって、「あふさかのはる」は当該歌初出である。

【補説】　語釈でも述べたように、年内立春を詠んだ歌。春が東国を急いで出発してしまったために今年の内に春に会ってしまった、と春を擬人化してユーモラスに詠む。

『鳥羽百首』については久保田淳氏に「全くの想像ではあるが、本百首は一応非公的な形を採りながらも、たとえば院の近臣達の間で内々に披講されたというような過程を採り、結局は後鳥羽院の叡覧に供されたのではなかったであろうか。」[4]との見解があり、従いたい。そうであれば、雅経歌の表現を同時代歌人が摂取した可能性が考えられる。

二　いまはさてこよひばかりとおもひねのあだにさめぬるふるとしの夢

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　今はそのまま眠ろう、今年も残すところ今宵だけだと思って寝たのに、はかなく覚めてしまった古い年の夢である。

【語釈】

○さて―ここでは副詞で、そのままで、の意。

○こよひばかり―今夜だけ。今年が、今夜一晩で終わってしまうことをいう。

○おもひね―ものを思いながら寝ること。恋しい人を思いながら寝る場合に用いられることが多いが、ここでは思った内容は「こよひばかり」。

○あだにさめぬるふるとしのゆめ―「あだ」は、ここでははかないこと。目が覚めたら新年になっていると思って寝たのに、旧年中に目が覚めてしまったことをいう。「あだにさめ」という表現は、他の活用形も含め、この歌以外に作例は見られない。「ふるとしのゆめ」も他に作例はない。

【補説】　目が覚めたら新年になっていたはずなのに、年が明けないうちに目を覚ましてしまったという失望を詠む。立春題で旧年を詠んでいるので、厳密にいうと題意を満たしていないのではないかと思われる。

---

(4)久保田淳氏『藤原定家とその時代』岩波書店、一九九四年、一四二ページ。初出「後鳥羽院歌壇はいかにして形成されたか」（『国文学』第二二巻第一一号、一九七七年九月、学燈社）。

三　あづまよりたちくるはるやこれならんかすみのおくのあけぼのゝそら

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　東国を発ってやってきて、立った春はこれなのだろう、霞の奥に曙の空が見えている。

【参考歌】

うらみばやかぜのやどりやこれならむ花散りつもる谷の岩かげ

（『壬二集』二一二二）

をののえのくちしみぎりやこれならむむれゐる鶴のぬしありげなる（『拾玉集』八八六）

たづねてぞ花としりぬるはつせ山かすみのおくに見えししらくも

（『秋篠月清集』三）

【語釈】

○あづまよりたちくるはるや―一番歌同様、五行説による。「たつ」は東国を「発つ」と、「立つ」春を掛ける。「たちくるはるや」という表現は当該歌以外には見られない。「たちくるはる」も雅経自身の「おとふくるなみにやとしもかへるらんたちくるはるはちかのうらかぜ」（『明日香井集』一〇五二）も含めて当該歌より後の作にしか見られない。

○これならむ―これなのだろう、の意。新古今歌人に多用された流行表現。新古今歌人の作例中早いものとして参考歌欄「うらみばや」「をののえの」歌がある。いずれも文治三年（一一八七）の詠。

○かすみのおく―詠作時が知られる中で最も早い作例が参考歌欄「たづねてぞ」歌で、建久三年九月披講の「花月百首」中の一首。それに続くのが当該歌という新しい表現である。

○あけぼのゝそら―新古今歌人に多用された流行表現。『拾玉集』に一一例、『拾遺愚草』に一〇例見られるほか、雅経も当該歌以外に七首に用いている。

【補説】　霞の向こうにほのぼのと明けようとする空を見て、この光景こそ春が立った証しなのだ詠む。内容には特に新しさはないものの、ゆったりとした詠みぶりの作。また、流行表現や新しい表現などを多く用いており、表現に新しさは認められよう。

四　けさよりはみやこのかたのゆきゝえてまだかたさゆるたにのした風

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　立春の今朝からは、谷の、都の側の雪は消えて、まだ片方は冷え冷えとしている、そのような谷の下の方を吹く風である。

【参考歌】

けふといへばもろこしまでも行く春を都にのみとおもひけるかな

（『新古今集』巻一、春上、五、藤原俊成、『長秋詠藻』四八三）

霞たつ四方の山辺をみわたせば春は都の物にぞ有りける（『続後拾遺集』巻一、春上、二九、藤原俊成・『正治初度百首』一一〇五）

行きめぐりわがたつそまと啼く鹿の人めはなれぬたにの下風

（『夫木抄』第一二、秋三、四六八九、藤原隆祐）

【語釈】

○みやこのかたのゆきゝえて―「みやこのかた」は都の方角。谷の、都側は春になって暖かいため雪が消えて、反対側はまだ寒いため雪が残っている、の意。

○まだかたさゆる―まだ片方だけ寒々としているの意と解した。「かたさ

ゆ」は当該歌以外に作例が見られない。
○たにのした風―「下風」は地面を這うように吹く風。「谷の下風」という表現の作例は、当該歌以外に一三例しか見られない。そのうち、参考歌欄「行きめぐり」歌は当該歌との先後が不明であるが、他はいずれも当該歌より後の作である。「行きめぐり」歌は詠作年次不明であるが、隆祐の生年が「建久末年頃から元久頃迄[5]」とされることを考えると、当該歌が初出の可能性が高い。
【補説】　参考歌欄に示した俊成歌二首と同様、春は都にまずやってくるという発想の歌であるが、同じ谷の、都側は雪が消え、片方だけ寒いというのは、いささか観念的であろう。

五　けさよりのながめはそれになりはてゝかすみもなれぬはつ春のそら
【校異】　なし
【他文献】　なし
【現代語訳】　立春の今朝からの眺めはすっかり初春らしくなって、霞も初春の空に慣れたことだ。
【参考歌】
さだめなき身はうき雲によそへつつはてはそれにぞなりはてぬべき（『千載集』巻一九、釈教、一二〇三、藤原公任・『公任集』二九七）
見ればげに心もそれになりぞ行くかれのの薄有明の月
（『西行法師家集』五五五）
たちそめてけふやいくかの朝まだき霞もなれぬ春のさ衣
（『拾遺愚草』二〇五八）
【語釈】
○ながめはそれになりはてゝ―「それ」が何を指すのかややわかりにくいが、「はつ春（のそら）」であろう。景色がいかにも初春らしくなったことを言う。「それになる」という表現の用例は少ない。当該歌以前の作例は、参考歌欄「さだめなき」「見ればげに」歌の二首のみである。作例が少ないのは、散文的な表現であるためであろうか。
○かすみもなれぬ―霞も空に発生することに慣れた、の意。「かすみもな（慣）る」という表現は当該歌以前には見られず、当該歌より後の作に三例見られる。そのうちの一首が参考歌欄「たちそめて」歌で、嘉禄元年（一二二五）の「権大納言家三十首」中の一首。雅経歌の「ぬ」は完了の意と解されるが、定家歌では打消の助動詞で、意は異なる。
○はつはるのそら―当該歌以前に作例はなく、当該歌より後の作に一〇例見られる。
【補説】　すっかり初春らしくなった景色を詠む。「初春の空」という表現は美しいと感じるが、一首全体は散文的で、特に「それになりはてゝ」は、具体性にも欠ける。

六　うぐひすもいであへぬほどのあけぼのにまづはるつぐる鳥のひとこゑ
【校異】　はる―言（書B）
【他文献】　なし
【現代語訳】　鶯もまだ出てこない頃の曙の時分に、真っ先に春の訪れを告げる鶏の一声が聞こえる。
【参考】
春のくるこのあかつきの鳥の音をはつ鶯とおもはましかば

[5] 佐々木孝浩氏「後鳥羽院歌壇成立期における一問題―正治二年十月一日歌合の代作説をめぐって―」（『国文学研究資料館紀要』第二二号、平成八年三月）。

（『清輔集』八）

鶏既鳴兮忠臣待旦　鶯未出兮遺賢在谷（『和漢朗詠集』六三、鳳為王賦）

伐木丁丁　鳥鳴嚶嚶　出自幽谷　遷于喬木（『詩経』小雅、伐木）[6]

【語釈】

○いであへぬほどの―『和漢朗詠集』や『詩経』に見られるように、鶯は春になると谷から出てきて鳴くとされるが、まだ出てきていない立春の頃の意。「あふ」はすっかり…しきるの意。

○とりのひとこゑ―鳥は特定の種類ではなく、単に鶯以外の鳥とも考えられるが、ここでは、曙という時間帯と、『和漢朗詠集』収載詩との関係から鶏と解した。鶯の声はまだ聞こえず、代わりに聞こえる鶏の一声を、春の訪れを告げるものとして聞いているのである。

【補説】　内容面では清輔歌に学び、表現面は『和漢朗詠集』を摂取したものであろうか。鶏は季節に関係なく夜明けを告げるが、立春の曙であるゆえ、春を告げるものとして捉えた。清輔歌では鶯でないことを残念に思う心情を詠むのに対し、雅経歌からは鶏の声も春を告げるものとして受け入れるおおらかさが感じられる。

七　いつしかもとくるつらゝはそれながらな〇（ミ撫）もきこえぬおとなしのたき

【校異】　な〇（ミ撫）もきこえぬ―なもきこえぬ（冷）、なもきこえぬ（書A）、〇（本ヤ）なもきこえぬ（書B）

【他文献】　なし

【現代語訳】　早くも解けた氷は、まだ流れることなくその場にとどまっていて、波音も聞こえない音無の滝である。

【参考歌】

のどかなる春の光やみがくらむ玉島河の波もきこえず

（『建保名所百首』二三、藤原行能）

【語釈】

○とくるつらゝ―他に作例がない。

○それながら―そのままであるけれどもの意だが、「それ」が具体的に何を指しているのかわかりにくい。氷が解けはしたものの少量であるため、まだ流れずその場にとどまっている状況を表現していると解した。

○なみもきこえぬ―底本の傍記に従い、「なみもきこえぬ」で解釈する。類似の表現である「波は聞こえず（ぬ）」「波ぞ聞こえぬ」なども含め、作例は当該歌より後の、参考歌欄に示した一例にしか見られない。

○おとなしのたき―複数の地の作例があり、所在地は一定しない。当該歌でどこが想定されているのかは判断しがたい。「音信がない」の意を含ませることが多いが、当該歌は叙景歌でその意は含まない。水が流れないために音がせず、その名の通り音無であるとする。

【補説】　立春を、氷がわずかに解け始めた景で捉えた作。「それ」という代名詞は五番歌にも用いられているが、何を指すのかわかりにくい。

八　けさこそはおなじ日かずにはるをしるこゝろのうちを人にしらるれ

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　今朝こそは、四季同じ日数を経て一年がたち、春が来たことを知るが、（そのことは皆同じであるゆえ、）そのような心の内を人に知られることだ。

---

⑥『和漢朗詠集』は『新編国歌大観』、『詩経』は『新釈漢文大系』（石川忠久氏、明治書院、一九九八年）による。

【参考歌】
長月もなのみなりけり春夏のおなじ日数にあきのくれぬる
（『月詣集』九月、七七八、顕昭）
これもまたおなじ日数にくれぬればなが月の名もかひなかりけり
（『重家集』四六五）
【語釈】
○おなじひかず―四季、同じ日数。当該歌以外のこの表現の作例は八例のみである。そのうち、当該歌に先行するのは、参考歌欄に挙げた二首。ただし、『月詣集』所載歌は、「なが月は名のみなりけり春夏のおなじ日数にくるる秋かな」（『新続古今集』巻五、秋下、六〇一、藤原為経・『宝治百首』一九七一）と酷似する。重家歌も類想で、ともに「長月」という名をもつのに長くなく、四季の日数は同じである点に着目した作。
○はるをしる―春の訪れを知る意。「（けさ）こそ…（しら）るれ」で係り結びとなっているため、三句切れではなく、「知る」は連体形で「心」に続く。
○こゝろのうちを人にしらるれ―四季が同じ日数であるという事実は万人共通であるため、同じ日数を経て春が来たことを知る、という心の内が他者にわかってしまうということ。
【補説】　下句の意がわかりにくいが、語釈に記したように解した。日数を指折り数えて春の訪れを待っていた心の内を皆が共有していたと、春になった喜びを間接的に歌った。「知る」の語が二度詠まれており、同心病との批判を受けかねないが、自分が知り、その心を他者が知るという段階があり、あえてこのように詠んだものであろう。

九　けさよりははなになりぬるおもかげのながめにかはるゆきのあけぼの

【校異】　なし
【他文献】　なし
【現代語訳】　立春の今朝からは、花の眺めに変わった。面影の眺めとなった雪の曙にとって代わって。
【参考歌】
日影さすほどをもまたぬ槿はただ面影の花にや有るらん
（『俊成五社百首』住吉社百首和歌、三四八・『玄玉集』巻七、初句「朝日さす」結句「花にぞ有りける」）
なぐさめは秋にかぎらぬ空の月春よりのちも面かげの花
（『拾遺愚草』一六八七）
【語釈】
○はなになりぬる―何が花になったのかは、下句から知られる。冬だった昨日までの雪の曙が、目の前から消えて「面影」の眺めとなり、今眼前にある眺めは花になった、ということ。
○おもかげのながめ―「おもかげ」は、目の前にないものがまるで存在しているかのように目の前に見える、そのありさま。「おもかげのながめ」と続く例は、他に見いだせない。また、「おもかげの＋名詞」の形も少なく、当該歌以前の作例は、参考歌欄「日影さす」「なぐさめは」歌のほかには一首に見られるのみであるが、『鳥羽百首』では他に三例、一二「おもかげの花」・三六「おもかげの月」・六六「おもかげのそら」が見られる。一方、その後雅経は一度もこの「おもかげの＋名詞」を用いておらず、この時期にのみ関心を持っていた表現であるようである。また、『明日香井集』において、「面影」の語が詠み込まれている歌は三六首存するが、そのうち八例が『鳥羽百首』に集中している。田村柳壹氏は「こほ

りのしたのおもかげ」という表現が用いられている『鳥羽百首』六七番歌について「言わば、心の眼で見ているがごとき表現」と述べている。[7]ここでも「雪の曙」を心の目で見ていると解されるが、実際の目で見ている花と対比することによって、季節の変化を描き出そうとしている。

○ゆきのあけぼの―平安時代の作例が三例ほどに過ぎないのに対して、新古今時代には三〇例以上見られる流行表現。特に慈円に多く、『拾玉集』に一〇例見られる。雅経にも当該歌のほかに、「ふるさとへかへるやまぢはさりともとこまをぞたのむゆきのあけぼの」（『明日香井集』一四一五）がある。

【補説】　雅経が『八雲御抄』で「人の歌を取る」と批判されていることはよく知られている。これについて田村柳壹氏は『鳥羽百首』を対象として詳細に検討し、次のように指摘している。「雅経が比較的近年に詠出された先人の歌を意識して詠んだと考えられる歌がみられることである。それら先行歌との類似や重なり合いの現象には、①本百首の詠作された建久期前後に流行の兆しを見せる表現を敏感に受けとめ、それを先取り的に詠みこんでいること、②良経・慈円・定家など、いわゆる新風歌人の作品に親しみ、特に、彼らが詠出した秀句的表現を見出して、それを学びとってゆこうとする詠歌姿勢の窺い知れること、などの傾向を認めることができる。[8]」と述べ、①の例として、当該歌と先行歌の内「打ちはらふころもでさえぬひさかたのしらつきやまの雪の明ぼの」（『右大臣家歌合』三一、俊恵）、「旅人ははれまなしとやおもふらんたかきのやまの雪のあけぼの」（同前、三四、藤原経家）、「ながめやるこころの道もなかりけり千さとのほかの雪のあけぼの」（『文治六年女御入内和歌』二七六、藤原良経・『秋篠月清集』一三七三、第三句「たどりけり」）などの五首を挙げている。雅経には、同時代歌人が創出したかと思われる表現を摂取した例が少なからず見られ、順徳院の「人の歌を取る」という批判も肯わざるを得ない面があるのは事実である。

一〇　もろ人のはるにあふべきゆゑなれやはこやの山のちよのはつそら

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　これが多くの人が春に会うであろう理由なのだろう、貌姑射の山が千年も続く、その初春の空である。

【参考歌】

これもなほ花ゆゑなれや木のもとに春の夜ぶかく月を見るかな

（『拾玉集』四八〇七）

すみがまのたえぬけぶりのゆゑなれやゆきにもかよふをののほそ道（『千五百番歌合』二〇一六、藤原公継）

雪は猶ふるとしながら立つ春はさえにしままの初空の月

（『蔵玉集』一一八、後鳥羽院）

山川やいはねの水のいはねどもあらしにしるし冬の初空（『院当座歌合正治二年十月』六、後鳥羽院・『後鳥羽院御集』一四九七）

【語釈】

○ゆゑなれや―作例は少なく、参考歌欄「これもなほ」「すみがまの」歌にしか見られない。このうち、慈円歌は詠作年不明、公継歌は当該歌より後の作である。

---

(7) 田村柳壹氏『後鳥羽院とその周辺』一九九八年一一月、笠間書院、一三三ページ。初出「藤原雅経の和歌活動とその詠歌をめぐって―特に、建仁元年新古今集撰集下命までを中心に―」（『中世文学』第二二号、一九七七年一〇月）。

(8) 田村氏前掲書一三四ページ。

○はこやのやま―中国で、仙人が住むとされた想像上の山。仙洞御所も指し、ここでは後鳥羽院の仙洞御所を指す。
○ちよのはつそら―仙洞御所は千年も続くであろうが、その最初である初春の空、の意。「はつ（初）」は「ちよのはつ」と「はつそら」の両方にかかる。「はつそら」は、初めてその季節らしい様子になった空の意で、ここではいかにも新春らしい空。「ちよのはつそら」は他に作例が見られない。「はつそら」自体が新しい表現と思われる。参考歌欄「雪は猶」歌が『後鳥羽院御集』等には見られず詠作年次不明であるほかは、当該歌より後の作にしか見られない。また、「山川や」歌について、判詞（衆議判）では「冬の初空もすこしめづらしくや侍らん」とする。

【補説】　仙洞御所、およびそこに住む後鳥羽院の繁栄を歌い、そうであれば人々もまた栄えるであろうと寿ぐ歌で、立春題の一〇首を締めくくる。

『蹴鞠別記』によると、鎌倉に住んでいた雅経に、建久八年一月七日、後鳥羽院から上洛を命じる御教書が届いた。雅経は二月に上洛し、後鳥羽院に蹴鞠に召されている。また、同年一二月には、侍従に任じられている。雅経が後鳥羽院歌壇で活躍するようになるのは、本百首詠作の二年後であるが、このような経過および当該歌の内容を考えると、やはり本百首は後鳥羽院の目に入ることを意識した作品であったのではないかと考えられる。

花

一一　こずゑにはまだはるあさしよしのやまさえたる風のおとばかりして

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　木々の梢にはまだ春は浅い。吉野山では冷え冷えとした風の音ばかりして。

【参考歌】
きえもやらずのこれるゆきのふるすいでてまだはるあさきうぐひすのこゑ（『通具俊成女歌合』二）
春あさきすずのまがきにかぜさえてまだ雪きえぬしがらきのさと（『山家集』九六七）

【語釈】
○まだはるあさし―春浅いため蕾も固いままで、まだ春らしい様子があまりないことをいう。この表現の作例は少なく、建仁三年（一二〇三）四月以前成立の『通具俊成女歌合』「きえもやらず」歌が当該歌との先後が不明であるほかは、当該歌より後の作例しか見られない。「春浅し」という表現も新しく、参考歌欄「春あさき」歌が初出と見られる。
○よしのやま―大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡。平安時代以降、雪深い地として詠まれる。また、桜の名所。ここの「梢」も桜の梢であろう。
○さえたる風の―「さえたる風」という表現は当該歌以外には作例がない。「風さえて」「風さゆる」という表現を用いるのが一般的。

【補説】　「花」題で、桜の名所吉野山を詠んでいながら、花は直接詠まれていない。春浅い梢を詠むことで、開花までは日数を要するであろうことを想像させるという趣向の作。

一二　これぞこのかすみのうちのこずゑよりまづさきだちしおもかげの花

【校異】　これぞこの―これはこの（書B）
【他文献】　なし
【現代語訳】　これが霞の中の梢から、本物の花に先立ってまず咲いた、面影の花なのだな。
【参考歌】
なぐさめは秋にかぎらぬ空の月春よりのちも面かげの花
（『拾遺愚草』一六八七）
【語釈】
○おもかげのはな―「おもかげの」という表現については九番歌の語釈参照。「おもかげの花」という表現の当該歌以外の作例は、参考歌欄「なぐさめは」歌のみで、定家歌が先行する。定家歌では春が過ぎた後も面影に残っている花の意であるのに対して、雅経歌では霞が立ち込めて桜の梢の周辺が白いために、咲いているかのように見えることを言う。
【補説】　桜の花の遠景を雲に見立てる、あるいはその逆は、和歌において少なくないが、ここでは霞の中の梢に花を幻視している。ここまでの二首は、まだ咲いていない桜を詠んでいる。

一三　さてはいかに人にはかはるけしきかなはなまちえたる春のやまかぜ
【校異】　なし
【他文献】　なし
【現代語訳】　それでは、どれほどほかの人が見たのとは違う景色を見たことだろう、花が咲くのを待って、ようやく見ることができたその時に春の山風が吹いたのだから。
【参考歌】
優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそうつらね
（『源氏物語』若紫巻、五二、北山の僧都）
やまふかみ花まちえたるわがやどを雲ゐるみねと人や見るらむ
（『拾玉集』四四八四）
【語釈】
○人にはかはる―人とは異なっている。当該歌以外には後代に一例しか見られない。
○はなまちえたる―「待ち得」は待ち受けて会う意。「花＋待ち得」が詠まれた例はすべて「はなまちえたる」の形だが、後代の作三例も含めて当該歌以外に六例しか見られない。当該歌に先行する三首のうちの二首を参考歌欄に示した。「待ち得」という語は、『明日香井集』では、当該歌を含めて七首に用いられているが、他の六首は、同じく『鳥羽百首』の二二のほか、一一二『正治後度百首』（正治二年〔一二〇〇〕）、五五一・五六九『春日社百首』（元久二年〔一二〇五〕）、八七五『老若五十首歌合』（建仁元年〔一二〇一〕）、一一三七（元久元年）で、雅経の歌歴（本百首の建久九年～承久三年〔一二二一〕）の中で早い時期に集中している。比較的若いころに関心を抱いた表現であったらしい。
【補説】　待った結果ようやく開花を見ることができた、その瞬間に山風が吹いたのを希少な体験であるとする。開花して間もないので、散る花は多くはなく、はらはらと舞う花びらが美しいのであろう。

一四　ながめやるたかねははなにうづもれてくものみふかきみよしのゝ山
【校異】　なし
【他文献】　なし

【現代語訳】　はるか眺める高嶺は花に埋もれていて、まるで雲ばかりが深くかかっているかのように見える吉野の山である。

【参考歌】

尋ねきて匂ひに花はしるけれど猶雲深くみよしののおく

（『正治初度百首』七一三、藤原忠良）

【語釈】

○くものみふかき―雲が濃くかかっている。満開の花に吉野山が包まれている様子を雲にたとえた。

【補説】　スケールの大きい作ではあるが、遠景の桜を雲に見立てるのは常套的で、工夫に乏しい。当該歌より後の作であるが、参考歌欄に示したような類想歌がある。

一五　たれもみな花にこゝろをうつしきてみやこのはるはしらかはのさと

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　誰もがみな花に心惹かれてこちらへやってきて、都の春は知らず、白川の里の春を楽しんでいる。

【参考歌】

かぎりなきにほひをそへて白川のさとのしるべはしかにざりける

（『定頼集』二二五）

〔　〕跡ももとより雪のすみかかないかがながむるしら川の里[9]

きみがかくたづぬるあとぞあはれなる雪のすみかのしら川の里

（『拾玉集』五五二四・五五三四、藤原定家・慈円）

【語釈】

○しらかはのさと―白川は山城国の歌枕で、比叡山に発し鴨川に合流していた川、およびその流域の鴨川の東側一帯の地名。平安時代中期以降、貴族の邸などが造られ、和歌に詠まれるようになった。桜の名所。「白川の里」という表現は、参考歌欄「かぎりなき」歌が初出と見られ、新古今歌人に作例が一〇例余見られる。『拾玉集』歌は建久六年の贈答。雅経歌では「白川」の「しら」に「知ら」を掛ける。

【補説】　四番歌に見られたように、春はまず都にやってくるという考え方があった中で、都を差し置いて白川の里の春を楽しむという発想の歌。定頼歌が藤原教通の別邸白川殿を寿ぐ歌、定家と慈円の贈答では白川の里は慈円の宿坊を指すことを考えると、雅経歌も誰かの邸を念頭に置いた作である可能性も考えられる。また、雅経歌には地名を掛詞とする例が多くみられるが、その最初である。

一六　たどりつるかすみはよそのながめにてにほひにこもる春の花かげ

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　目指してやって来た霞は遠く離れた眺めとなって、今私は春の花陰の美しさの中に籠っている。

【参考歌】

朝夕のけぶりをよそのながめにてあはれいつまであかしくらさむ

つきもせぬよそのながめのゆふけぶりいつ身のうへに有明の空

（『拾玉集』五二六三・五二七三、隆寛・慈円の贈答）

【語釈】

[9] 欠字の部分を、久保田淳氏『藤原定家全歌集　下』（ちくま学芸文庫、二〇一七年）では、一本により「君が」と補う。

○たどりつる―「辿る」は探して手に入れる意で、ここでは霞に近づこうとしてやってきたことをいう。
○よそのながめ―「よそ」は、無関係の意と空間的に隔たった意がある。ここでは後者だが、前者のニュアンスも含むか。結局霞に近づくことはできず、花に出会ったために霞への関心が薄れたことをいう。「よそのながめ」という表現の作例は少なく、当該歌に先行するのは参考歌欄に示した二首のみで、建久二年の詠。
○にほひにこもる―春の花陰の美しさに包まれている意と解したが、「にほひ」は香りの意とも考えられる。「にほひにこもる」という表現は、当該歌以外には後代の作一首にしか見られない。
○はるのはなかげ―当該歌以外には作例はない。
【補説】　霞を求めていたのに、花に出会い、満開の桜に包まれる喜びを歌う。また、他に作例のない、あるいは少ない表現を多用しており、新しさを求めた作と感じられる。

一七　さきそめし花にこゝろをいれしよりはるの日かずはみよしのゝやま
【校異】　なし
【他文献】　なし
【現代語訳】　咲き始めた花に心を奪われて以来、春の日数はここ吉野の山で過ごしている。
【語釈】
○こゝろをいれしより―「こころをい（入）る」は執着する意。
○みよしののやま―「み吉野の山」の「み」に「見（る）」を掛けると解した。「見る」は経験する意。
【補説】　吉野山の桜の美しさに魅せられ、はからずも長い日数を過ごすことになったと詠む、平明な作。

一八　花かともおもひもはてぬやまぢよりながめもまがふみねのしら雲
【校異】　ながめもまがふ―ながめもまよふ（冷・書A・書B）
【他文献】　なし
【現代語訳】　花かと判断もつかないうちに、山路を来て、眺めても見分けがつかない峰の白雲であるとわかった。
【語釈】
○おもひもはてぬ―「思ひ果つ」は最終的に判断する意。「おもひもはてぬ」で、判断するに至らなかった意。花かなと思ったが、判断がつく前に白雲であると気づいたと解した。
○ながめもまがふ―「ながめもまがふ」であれば眺めても区別がつかない意、「ながめもまよふ」であれば眺めても判断に迷う意で、意味に大きな違いはない。また、いずれであっても、他に作例は見られない。
【補説】　解しにくい歌である。別解として、「ぬ」を完了の助動詞と捉え、花かと思いこんでしまった、山路からいくら眺めても見分けがつかない峰の白雲を、と解することもできようか。そのように解すると、一見した時には花だと思ったが、白雲であったという歌となる。

一九　とにかくにおもふもかなしよしのやまはなゆゑにやはいらんとおもひし
【校異】　なし
【他文献】　なし
【現代語訳】　あれこれと物を思うのも悲しい。吉野山に花のために入ろうと思ったであろうか。

【参考歌】
このもとははなゆゑにやはすみそめしちれば心のあくがれぬらん
（『唯心房集』一一）
世をすてばいらんと思ふやまのはにかねてかたらふほととぎすかな（『新和歌集』巻二、夏、一一五、藤原頼業）
【語釈】
○はなゆゑにやはいらんとおもひし―花を見るために吉野山に入ろうと思ったわけではないの意。「はなゆゑにやは」という表現の作例は、当該歌以前には「このもとは」歌にしか見られない。また、「入らむと思ふ」という表現も、当該歌以前には「世をすてば」歌のみで、当該歌より後の作には、雅経の孫で『明日香井集』撰者である雅有の作が一例ある。
【補説】 花を見るためではなく、世を捨てようと吉野山に入ったので、美しい花を見ても心慰まず、悲しいということであろうか。上句と下句の関係がやや不明確である。当該歌は、表現面で寂然（俗名は藤原頼業）の二首と共通しており、念頭にあった可能性が考えられる。ただし、『新和歌集』は雅経没後の成立なので、雅経が「世をすてば」歌を知りえたか疑問は残る。

二〇　おのづからあをばにのこる花のいろやつらきあらしのなさけなるらん
【校異】　なし
【他文献】　なし
【現代語訳】　たまたま青葉の上に残っていた花の色は、冷淡な嵐のせめてもの情けなのであろうか。
【参考歌】
あぢきなくつらきあらしのこゑもうしなどゆふぐれにまちならひけん
（『新古今集』巻一三、恋三、一一九六、藤原定家・『拾遺愚草』一六八）
【語釈】
○あをばにのこる―青葉に、嵐によって散った桜の花びらがついて、残っていた。当該歌以前にこの表現の作例はなく、後の作に五例見られる。
○つらきあらし―当該歌以前の作例は「あぢきなく」歌一例のみで、後の作に一〇例見られる。
【補説】　田村柳壹氏は九番歌で挙げた本百首の特徴のうち②の例として、当該歌と参考歌欄に示した定家歌を示し、「雅経は先人の秀句的表現を積極的に学び用いている。」と述べている[10]。定家歌は、文治二年（一一八六）『二見浦百首』中の一首。定家歌から学んだとすれば、恋歌を自然詠に転じ、定家歌では「うし」と厭われている嵐の小さな心遣いを詠んでおり、異なる歌境を作り得ているのではないだろうか。また、雅経には嵐を詠んだ歌が多く、『明日香井集』には六九例見られる。

郭公

二一　はなもまだわすれぬほどのゆめぢよりやまほとゝぎすはるになくなり
【校異】　なし
【他文献】　なし
【現代語訳】　花のこともまだ忘れていない頃の夢の中から、山ほととぎすが春に鳴く声が聞こえる。
【参考歌】

[10] 田村氏前掲書、二三五～六ページ。

まどろむとおもひもはてぬ夢路よりうつつにつづく初雁のこゑ

（『拾遺愚草』三四五）

【語釈】

○はなもまだわすれぬほど―桜の季節が終わったばかりで、まだ満開の記憶が心に残っている頃。「わすれぬほど」という表現の作例は、当該歌以前には見られない。

○ゆめぢより―「ゆめぢ」はここでは夢と同義。「ゆめぢより」という表現の作例は多くない。新古今歌人では参考歌欄に示した定家歌のほかに、慈円に二例、藤原家隆に一例、寂連に一例見られるほか、雅経自身に「なみのおとまつのあらしのうらづたひ夢ぢよりこそとほざかりぬれ」（『明日香井集』一七二・『正治後度百首』二七九）がある。

○やまほとゝぎす―山にいるほととぎす。ほととぎすは五月になると山から里へ下りてくるとされていた。

【補説】　「夢路より」という表現は、定家歌から学んだかと思われる。定家歌は夢の中で雁の声を聞いたと思ったら、現実に聞こえていたというもので、雅経歌でも、明確ではないが、現実にほととぎすの声を聞いていたのであろう。花の記憶もまだ新しいうちに、ほととぎすの声を聞くことができた幸運を喜ぶ思いを詠んでいる。春に鳴くほととぎすを詠んだ歌は多くはない。「ほととぎすおもひもかけぬはるなけばことしぞまたではつねききつる」（『後拾遺集』巻二、春下、一六二、藤原定頼・『定頼集』六四）が早い例かと思われる。近い時代では「うれしともおもひぞわかぬ郭公はるきくことのならひなければ」（『山家集』一八九）などがある。

二二　ほとゝぎすまちえぬほどのなぐさめはこゝろにとめしこぞのふるごゑ

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　ほととぎすが鳴くのを待っても果たせなかった時の慰めは、心に留めておいた去年の古声を思い出すことである。

【本歌】

さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこぞのふるごゑ

（『古今集』巻三、夏、一三七、よみ人しらず）

【語釈】

○まちえぬほど―「待ち得」という語については、一三番歌の語釈参照。

【補説】　『古今集』歌を本歌としていると思われる。本歌が、去年の古い声でも良いから今すぐに鳴いてほしいと詠むのに対して、声を聞くことができなかった時には、心の中にある去年の古い声を慰めとすると詠み、異なる心のありようを提示している。九番歌の「おもかげのながめ」などに通じる発想で、田村柳壹氏の表現を借りると、心の耳で聞いているということになろうか。

二三　とにかくになごりぞおもふほとゝぎすきゝだにはてぬこゑのあけぼの

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　あれこれと名残惜しく思っている。ほととぎすの一声を最後まで聞くことすらできなかった曙に。

【参考歌】

はなにあかぬなごりをおもふ春の日の心もしらぬかねのおとかな

（『秋篠月清集』一〇一九）

こころさへくもぢにきえぬほととぎすなきてすぐなるこゑのあけぼの

（『寂蓮無題百首』二四）

【語釈】

○なごりぞおもふ―類似の「なごりをおもふ」は、参考歌欄「はなにあかぬ」歌などが先行するが、「なごりぞおもふ」は雅経に「はつねよりなごりぞおもふうぐひすのみやこへいづる春のやまざと」（『明日香井集』一〇一、『正治後度百首』二〇八）があるほかは後代に二例見られるのみである。

○きゝだにはてぬ―ほととぎすは飛びながらも鳴くため、たった一声ですら最後まで聞くことができなかったことをいう。

○こゑのあけぼの―声がした曙の意。当該歌以前の作例は参考歌欄「こころさへ」歌のみで、他は後代に一例見られる。

【補説】　良経歌と寂蓮歌の二首から表現を学んだかと思われる。特に寂蓮歌とは詠まれている状況も似ており、念頭にあったのではないかと考えられる。

二四　まちきつる五月のころになりぬればくもにこゑある夕暮のそら

【校異】　まちきつる五月のころに―まちきつる月のころに（書B）

【他文献】　なし

【現代語訳】　ずっと待っていた五月になったので、夕暮の空では、雲に声があるように思われる。

【参考歌】

時鳥あかでややまんまちきつる今朝のね覚のただ一こゑを

（『公任集』六一）

人のしる秋の外なるあきなれや雲に色あるゆふ暮の空

（『拾玉集』三九八六）

【語釈】

○まちきつる―「待ち来」は待ち続ける意。「まちきつる」は作例の少ない表現。当該歌以前の作例は、参考歌欄「時鳥あかでややまん」歌のほか、『山家集』九八にしか見られない。類似の「まちきける」は『元真集』四五に見られる。

○くもにこゑある―雲の中から声が聞こえるような気がするの意。

【補説】　田村柳壹氏は、九番歌で挙げた本百首の特徴②の例として、当該歌と参考歌欄に示した慈円歌を挙げ、「特に、２４『雲に声ある夕暮の空』の場合は慈円歌の下句の『色』を『声』に変えただけの表現であり、一首の趣向や主題に変化は認められるとはいえ、雅経が『人の歌を取る』という非難を免れ難い一面をもっていたことの一証にもなろう。」と述べる。[11] ただし、視覚で捉える景物である雲に声があると表現するのは、共感覚的表現であると考えられる点は注意してもよいのではないだろうか。共感覚的表現とは、ある現象等を本来捉えるべき感覚以外の感覚で捉えた表現をいう。[12]

二五　さつきやみくもぢもみえぬさよなかにやまほとゝぎすこゑまよふ

---

[11] 田村氏前掲書二三五～二三六ページ。

[12] 共感覚的表現については、早くに赤羽淑氏が藤原良経において「諸感覚相互の間に」「交感、転移が行われる」歌が多いことを指摘している（「良経初期の歌風」『文芸研究』（日本文藝研究会）第三五集、一九六〇年七月）。また、同様の詠法の歌が他の新古今歌人らにも見られることを稲田利徳氏が論じ、『明日香井集』中に共感覚的表現の歌は九首存すると述べ、三二・八二九番歌を例示している（「共感覚的表現歌の発生と展開　上下」『岡山大学教育学部研究集録』第四三号、一九七五年八月・第四四号、一九七六年一月）。

なり

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　五月闇で雲路も見えない夜中に、山ほととぎすの声が迷っているのが聞こえる。

【参考歌】

むさしののきぎすよいかにこや思ふ煙のやみに声まよふなり

（『後鳥羽院御集』一一〇三・『老若五十首歌合』三六）

しののめや吹きさだまらぬ秋風に尾上の鹿のこゑまよふなり

（『後鳥羽院御集』一四九六・『院当座歌合』三四）

そらやうみ月やこほりとさ夜ちどり雲よりなみにこゑまよふなり

（『千五百番歌合』一九一九、藤原忠良）

降りまよふ雪気のくもの波風に吹上の千鳥声まよふなり

（『最勝四天王院障子和歌』一一四、俊成女）

【語釈】

○さつきやみ―陰暦五月の、梅雨時の夜が暗いこと。また、その暗闇。

○くもぢもみえぬ―「くもぢ」は鳥などが通う、雲の中の道。「くもぢもみえぬ」という表現の作例は当該歌以前には見られない。

○さよなか―夜中。「さ」は接頭語。

○こゑまよふなり―暗闇で聞こえるほととぎすの声が、道に迷っているかのようである、の意。

【補説】　「こゑまよふなり」という表現は当該歌以前には見られないが、同時代歌人の作に、参考歌欄に示した四首がある。後鳥羽院の作は、『院当座歌合』が正治二年（一二〇〇）九月三〇日、『老若五十首歌合』が建仁元年（一二〇一）二月で、いずれも建久九年に当該歌が詠まれてからあまり時間を経ずに詠まれている。特に「むさしのの」歌は闇の中の鳥の声を詠んでおり、雅経歌からの摂取であろう。忠良歌は、景は異なるものの、声が聞こえてくる方角が定まらないという内容は後鳥羽院の「しののめや」歌に通じ、この歌から想を得た可能性が考えられる。俊成女歌は、「雪気」や「吹上」という新たな要素はあるものの、忠良歌と類似しており、これを念頭に詠んだのかもしれない。前述のように、後鳥羽院が『鳥羽百首』を見た可能性が考えられ、院が雅経歌から「こゑまよふなり」という表現を摂取し、さらに他の歌人が後鳥羽院歌から摂取するという連鎖が生じたと仮定できるのではないだろうか。「人の歌を取る」と批判された雅経であるが、実はこの例のように、他の同時代歌人が雅経歌の表現を摂取したと思われる場合も少なくない。その中で雅経歌からの摂取が比較的多いのは後鳥羽院である。

二六　したひゆくこゝろのすゑになくこゑもきくこゝちするほとゝぎすかな

【校異】　なし

【他文献】　なし

【現代語訳】　追い求めてきた心の結果として、ほととぎすが鳴く声を聞いた気がする。

【参考歌】

郭公しのぶる声をききつてふかへるかたにもしたひゆくかな

（『為忠家後度百首』一七五、源頼政）

しらかはの春のこずゑの鶯ははなのことばをきくここちする

（『山家集』七〇、『夫木抄』第四、春四、一三一八）

すみのぼるよるのことぢは松風を聞く心ちしてみにぞしみにし

（『頼政集』六五五）
あやめ草かをる軒ばの夕風にきく心ちする郭公かな
（『拾遺愚草』一二三・『御裳濯集』二二九）

【語釈】
○したひゆく―追い求めて行く意。参考歌欄「郭公しのぶる声を」歌などが早い例と思われる。作例は少なく、当該歌を含めて一五例ほどだが、そのうち五例でほととぎすに対して用いられている。
○こころのする―思いの結果。新古今歌人に多用された流行表現。特に慈円に多く、『拾玉集』には一一例見られる（そのうち二例は良経歌）。
○きくここちする―聞いた気がする。「聞く心地す」という表現も作例は少ない。参考歌欄「しらかはの」「すみのぼる」歌などが早い例と思われる。

【補説】　ほととぎすの声を聞きたいと追い求めて行った結果、とうとう空耳で聞いた気がするという内容であるが、参考歌欄「あやめ草」歌と下二句が同一で、この歌から摂取した可能性が考えられる。定家歌は文治二年『二見浦百首』中の一首で、端午の節句の日、菖蒲で葺いた軒端にその香りが漂っている、そこに吹いてきた夕風がほととぎすの声を運んできた気がした、というもの。空耳である点は同じだが、雅経歌はほととぎすの声を求めるあまり、最後には聞いた気がするというもので、説明的であろう。

二七　つねならぬこゑやはつらきほとゝぎすさてこそあかぬ人のこゝろを

【校異】　なし
【他文献】　なし

【現代語訳】　いつも声を聞くことができないのがつらいことがあろうか、ほととぎすよ。そうであってこそ飽き足りない人の心よ。

【語釈】
○つねならぬ―無常ではかないことを意味する場合もあるが、ここではいつも聞くことができる訳ではないの意。

【補説】　いつも聞くことができる訳ではないからこそ、新鮮でもっと聞きたいと思うのだと、ほととぎすの声への執着をやや逆説的に詠んだ作。